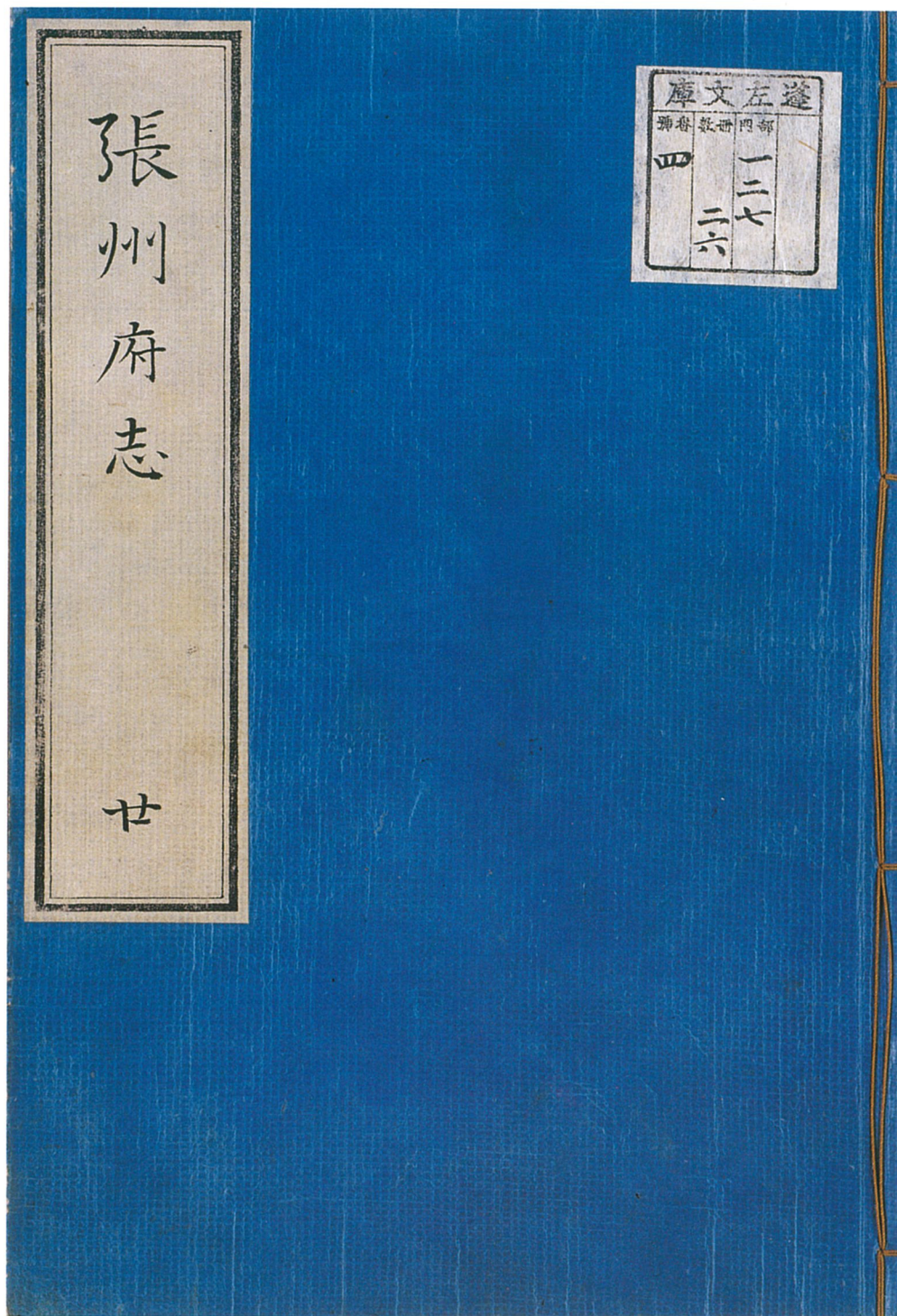




◆表紙さまざま 張州府志（解説八ページ）

蓬 右

HÔSA

NO. 59

名古屋市蓬左文庫

HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

三、中近世熱田史料 1

十月三日～十一月四日

十一月七日～十二月六日

四、中近世熱田史料 2

一月九日～二月七日

二月二十日～三月二日

伊勢湾の北岸にある尾張熱田社（名古屋市中熱田区）は、草薙剣を祭る古代以来の有力神社であり、京都の朝廷をはじめとして、広く崇敬を集めました。熱田社の門前町として始まったと思われる熱田の町は、その背後に肥沃な濃尾平野を控え、水陸交通の要地に位置していたこともあって、中世尾張における、屈指の港湾都市に成長を遂げました。

◆中世の熱田

熱田社本宮の南、八剣宮から源大夫社（上知我麻神社）にかけての南北の通り（江戸期の市場町・上神戸町あたり）には、中世以来、市が開かれて、多くの人々や物資で賑わいました。関東の諸市で、市祭の際に読みあげられた祭文（応永二年・一四五書写という）にも、「尾張国あつた（熱田）の大明神も熱田に市をたてたまふ」と、当時の東国にも熱田市は知れわたっていました。

当時の熱田社や町の様子は、「享祿古図」などの熱田社古図に具体的にうかがうことができます。上半分に描かれた熱田社本宮・摂社や神宮寺の南に、家並みがつらなり、往来する人々にぎやかな、繁栄した町や市の光景が描かれています。市場の橋本市（作）左衛門家や佐橋氏、中瀬（中瀬子）の宮大工

岡部又右衛門家、中瀬浅井家、中瀬竹田家、須賀の浅井杏庵家など戦国期以来の有力町民の居住が知られています。

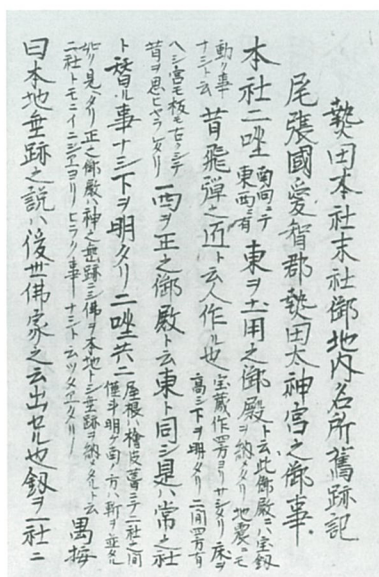
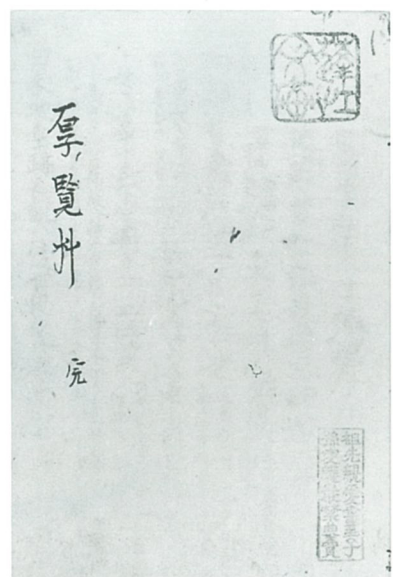
しかし、町々の南は、すぐに海浜に接していました。木之免、大瀬子、東脇などの海浜部の諸浦は、舟運や漁業のための港としての役割を古くから担っていました。熱田の町の中核として発展するのは、戦国・織豊期に熱田の豪商加藤氏らによる開発を経てからと考えられています。

熱田加藤氏は、鎌倉幕府御家人加藤景康の子孫と伝えられますが、東西両家に分かれて海上交易や金融業を営む一方で、漁村が点在する海浜部に一族の屋敷や寺院を建設するとともに、道路を整備し、町並みを造成するなど、熱田の町が宿場として将来発展する基礎を築きました。織田・豊臣氏とも結びつき、熱田の代官を勤めるなど、戦国・織豊期の熱田における、加藤氏の存在は誠に大きなものがありました。

また、江戸前期に熱田（宮）宿の間屋・舟年寄役を勤めた、荒尾屋大森氏は、戦国期以来の東脇の住民と伝えられています。永祿八年（一五六五）・天正元年（一五七三）に、宮荒尾屋平左衛門の持船が、伊勢大湊（三重県伊勢市）に入港しており、平左衛門は、同じ屋号からみて、大森氏一族とのつながりが想定されます（伊勢市大湊支所文書）。とすれば、荒尾屋大森氏は、戦国織豊期に、廻船業者として伊勢湾沿岸で活躍していたと考えられます。

◆近世の熱田

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いのころを境に、熱田の町は、大きく移り変わります。熱田の行政は、従来の熱田加藤氏に代わって、尾張藩の熱田奉行が担当し、尾張藩の支配が強く及ぶようになります。また、慶長四年の大火で熱田社の一部や町



→ 草庵厚

尾張藩士堀貞高による熱田の地誌で、延宝6年(1678)成立。

← 熱田町旧記

熱田の町の地誌で、元禄12年(1699)成立。写真は、東加藤家に領地を与えた際の徳川家康朱印状の写。

熱田関係年表

年代（西暦）	熱田
永享 4 年 (1432)	將軍足利義教、富士遊覧の途次、熱田で連歌会を催す。 〈1467～77 応仁・文明の乱〉
延徳 元年 (1489)	加藤景繁（熱田加藤氏）、田を笠覆寺（笠寺観音）に寄進する。
永正 2 年 (1505)	この頃、加藤景繁、熱田片町に海禪院を建てる。
永正 15 年 (1518)	尾張守護代織田達勝、熱田門福寺に禁制を下す。 〈1534 織田信秀の子、信長生まれる。〉 〈1538 頃 織田信秀、名古屋城攻略〉
天文 8 年 (1539)	織田信秀、熱田加藤氏に、商取引上の特権を認める。
天文 16 年 (1547)	徳川家康、織田信秀の人質として、加藤順盛に預けられる。
天文 18 年 (1549)	織田信長、熱田八ヶ村に制札を下す。 〈1553 頃 織田信秀没し、信長が相続する。〉
永禄 10 年 (1567)	連歌師里村紹巴、熱田羽城の加藤順盛邸を訪れる。 〈1568 織田信長、足利義昭を奉じて、上京する。〉
元亀 元年 (1570)	織田信長、熱田に撰銭令を下す。
元亀 二年 (1571)	熱田の加藤全朔、没する。 〈1582 本能寺の変により、織田信長没する。〉
天正 12 年 (1584)	小牧・長久手の戦いのため、熱田町民、熱田の町の防備を固める。
天正 18 年 (1590)	豊臣秀吉、熱田の町に法令を下す。
文禄 4 年 (1595)	豊臣秀吉、熱田加藤氏に領地を与える。 〈1598 豊臣秀吉没する。〉
慶長 4 年 (1599)	熱田に大火有り。 加藤景延、清須城主福島正則に殺される。 〈1600 関ヶ原の戦い。〉 〈1609 徳川家康、清須城から名古屋への移転を決定する。〉
慶長 15 年 (1610)	この頃、福島正則、徳川家康の命により堀川を開く。
慶長 16 年 (1611)	原田右衛門、熱田奉行となる。（国奉行兼任） 〈1620 頃 徳川義直、尾張藩主として藩政をみ始める。〉
寛永 6 年 (1629)	尾張藩、熱田白鳥に材木場を設ける。
寛永 10 年 (1633)	尾張藩、大瀬子・須賀浦などを埋め立て、魚問屋を認める。
寛永 11 年 (1634)	尾張藩、東浜御殿を建てる。
寛永 16 年 (1639)	尾張藩、熱田に熱田奉行所を建てる。
承応 3 年 (1653)	尾張藩、西浜御殿を建てる。
寛文 5 年 (1665)	尾張藩、寺社奉行を設ける。 〈1698 尾張藩、「尾張風土記」の編纂を始める。〉
元禄 12 年 (1699)	熱田の町の地誌『熱田町旧記』成る。

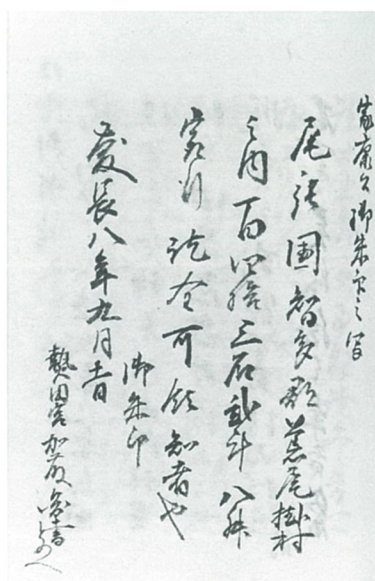
が焼けて、徳川家康の指示により熱田社の再建や都市改造が実施されました。その後熱田奉行所や御殿などの尾張藩の施設が造営され、大瀬子浦・須賀浦などが埋め立てられて町並みが形成されて、熱田の町の景観は大きく変わりました。

名古屋築城により、名古屋が政治・経済の中心となると、名古屋城から熱田に通じる運河、堀川が開削されて、米・木材・塩などの物資が、熱田の港から、堀川を利用して運ばれるようになりました。名古屋とより密接な関係をもつようになった熱田は、熱田社の門前町、七里の渡しで知られる東海道有数の宿場町（宮の宿）としても、繁栄をみるにいたり

ました。一六世紀末の熱田の家数は二、〇〇〇軒といわれていますが、約一〇〇年後の元禄一二年（一六九九）には、熱田の町の家数二、八七二軒、人口一三、九九九人となりました。

*** ** * * * * *

蓬左文庫の蔵書の中から、今秋は「中近世熱田史料1」として、主に中世熱田に関する史料を、初春には「中近世熱田史料2」として、主に江戸中期までの熱田に関する史料を紹介します。和歌集・紀行文、寺社縁起、地誌・絵図、文書・記録など多彩な史料を展示しますので、ぜひご覧ください。





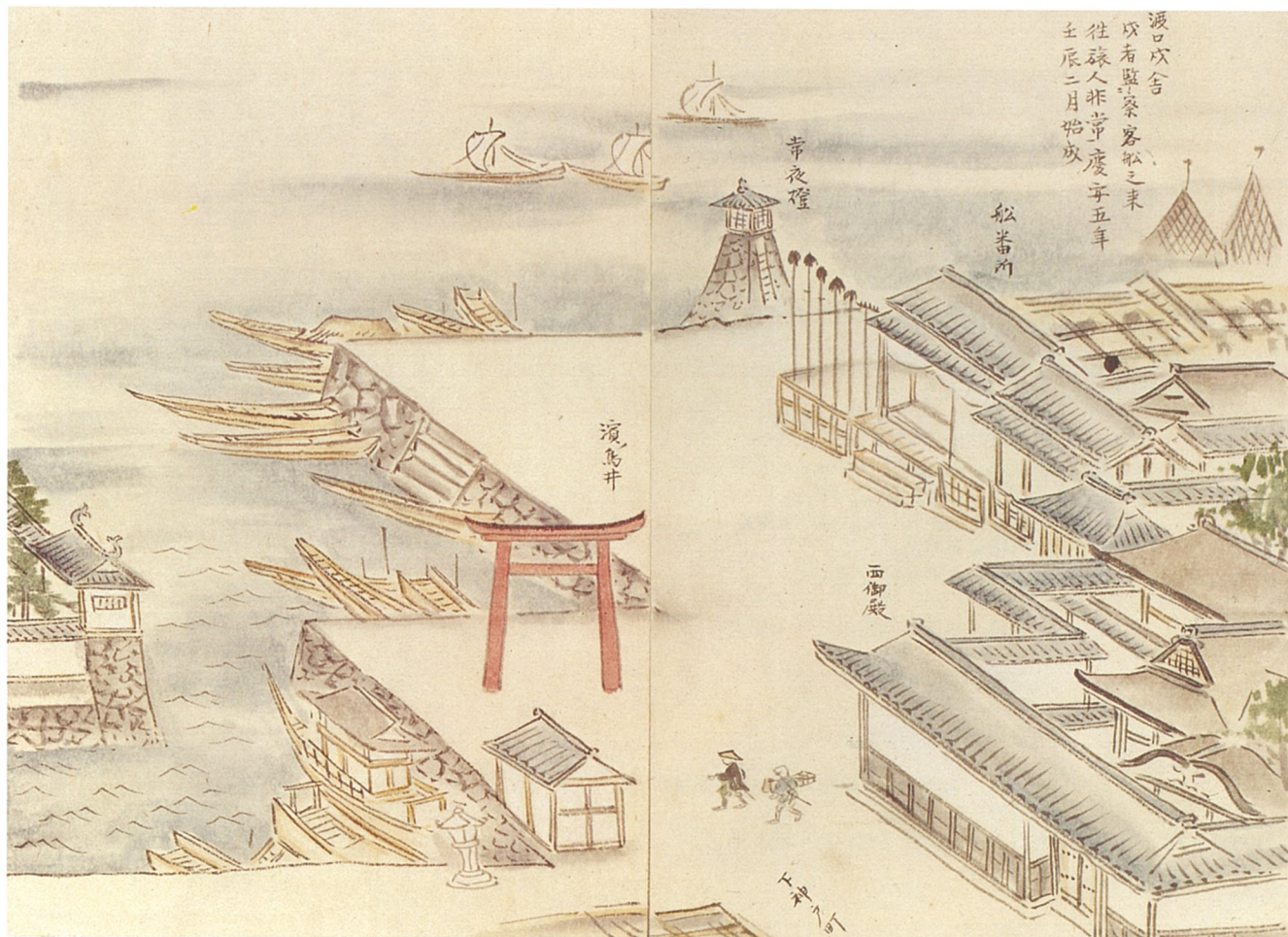
張州雜志 100巻100冊

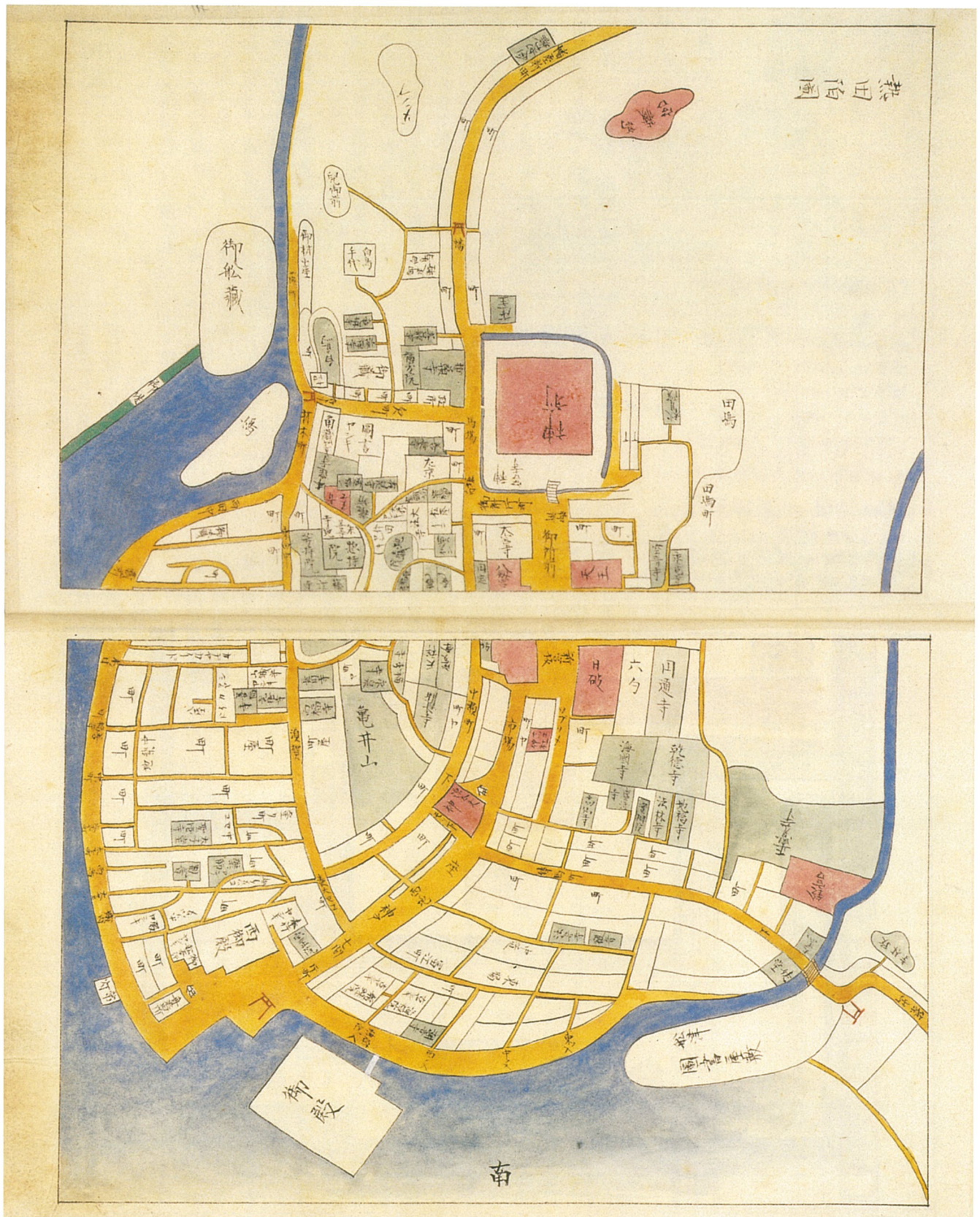
内藤東甫編 (29.1×19.1cm)

左 享禄年中熱田古図(享禄古図、部分)

下 熱田湊之図

享禄2年(1529)作成と伝えられる「享禄古図」にみえる中世の熱田の海浜のようすと、江戸中期の熱田湊(七里の渡し)のようすをみくらべてみると大変興味深い。





張州府志付図 熱田陌図（6頁参照）

熱田の魚市と「中座」

尾張熱田の魚市は、『尾張名所図会』にも描かれ、江戸時代から戦後まで、木之免・大瀬子（古）の海浜（現名古屋熱田区）で開かれていたことは、よく知られている。しかし、古くは、木之免・大瀬子の海浜以外の場所にも魚市が存在したらしいことが江戸期の文献や絵図などからうかがうことができる。

源大夫神近辺、古は潮満干有りと伝ふ。此の社辺南方に魚の店有り、中座と呼ぶ。右の後の方三尺程の細道有り、竜燈道と云ふ。昔此の社へ竜燈上りしより名づく。（原文の片仮名使い等変更）

右の文章は、元禄十二年（一六九九）成立の、熱田の地誌『熱田町旧記』の神戸町の記事の一節であるが、「源大夫社（上知我麻神社）」の近辺は、往古には潮の満干きするところであったと伝えられている。この社辺の南方に魚店があつて、『中座』といわれている」とある。元禄十二年ごろ、熱田の神戸町（現名古屋熱田区）の、源大夫社の南に「中座」と呼ばれた魚店が存在したことが注目される。

熱田絵図にみえる「中座」

この源大夫社の南にあつたという「中座」は、江戸時代に作成された熱田絵図のなかにも、見ることができる。明和八年（一七七二）写の、「尾州熱田画図」（名古屋博物館所蔵）をみると、源大夫社の南の通り（上神戸町）に、南北に細長い区画が、大小二カ所描かれ、「中座」・「ナカサ」（なかざ）と記されている（写真1）。その位置からみても、これが『熱田町旧記』の「中座」であり、通りの中

にあるその細長い区画は、魚店の集まる市場の施設と考えられる。この場合の「座」は、中世の商業者組織を指すのではなく、商品売買のために割り当てられた場所を意味し、通りの中に設けられたので「中座」と呼ばれたのであろう。

同様の描写は、『熱田曲輪図』（西尾市岩瀬文庫所蔵）にもみることができ、江戸時代中期成立と思われるこの絵図にも、源大夫社の南の、「上神戸町」の通りに、同様の区画が二ヶ所描かれ、どちらも「中座」と記されている。

また、宝暦二年（一七五二）に尾張藩により編纂された、尾張国の地誌『張州府志』（蓬左文庫所蔵）附録の「熱田陌図」（五頁写真参照）にも、同様の区画が描かれ、「座」と記されており、単に「座」とも呼ばれていたことがわかる。

さらに、名古屋城下と熱田を併わせて一枚に描いた「名古屋并熱田図」（徳川美術館所蔵）にも、「中座」等の呼称こそ記されていないが、同様の細長い区画が描かれている。中座を描いているとみてよい。本図は、寛延元年（一七四八）～宝暦十三年（一七六三）の間、一八世紀中頃の成立と推定されており、前出の「尾州熱田画図」はじめ三点の絵図も含めて、いずれも江戸時代中期の熱田絵図に、中座が描かれていることが注目される。

他方、天保一五年（一八四四）に尾張藩により再度編纂された尾張国の地誌『尾張志』（蓬左文庫所蔵）付図の「熱田」をはじめとした、江戸時代後期成立の熱田絵図には、管見の限りでは、中座が描かれなくなる（注）。恐らく、江戸時代中期までは、海浜から遠ざかりつつも、源大夫社の南の、中座で魚市が続けられていたが、後期に入ると、熱田の魚市は、『尾張名所図会』にみられるように、木之免・大瀬子の海浜のみとなったとおもわれる。

「中座」と市場町

江戸時代中期までの中座の存在が事実とすると、中座のある上神戸町の通りと、源大夫社を境に隣接する市場町の通りとは、どのような関係が考えられるだろうか。『熱田町旧記』などの江戸時代の史料は、市場町の通りで歳末や正月に市が立つことを町名の由来としているが、市場の町の呼称は、戦国期の史料に確実にみえており、中世熱田の市がそこに立ったことに由来すると考えられる。おそらく、中座のような常設市（定期市から始まった可能性も）が北の市場町の通りにも存在し、其の南端、最も海浜に近いところを魚市（中座）が占めていたと考えるのが自然であろう。のちに、市場町の通りは常設店舗主体となり、中座のみが常設市として残ったと想像されるのである。

以上の推定が正しいものとすれば、正保二年（一六四五）の『熱田諸領田畑屋敷取調書写』（鶴舞中央図書館所蔵）にみえる「魚座」にも、新たな検討を加えることが可能となる。

市場

（中略）

- | | |
|-----------|----------|
| 一 魚座西ノ方式間 | 同（橋本善四郎） |
| 一 同 東ノ方三間 | 同 |

市場町の有力町民橋本善四郎が所持していた魚座は、市場町の通りと隣接している、上神戸町の通りにあつた「中座」の一部を構成していたと考えられるのである。同じ正保二年に宮大工岡部又右衛門も「魚座 屋敷 一歩」を所持しているが、宮大工の岡部氏が、実際に魚商売に従事することは考えにく

く、魚商人に賃借させて利益を得ていたと思われる。橋本・岡部氏は、いずれも戦国期以来の熱田の有力町民であることからみて、魚座に対する権利も戦国期までさかのぼると推定される。

魚座は、「屋敷 一步」と記されていることからみて、間口・奥行ともに一間（一間四方が一步＝一坪）を基準単位として割当てられていたが、実際には「半坪」や「二間・三間」のように分割・併合される場合もあった。橋本・岡部氏などのように、権利所有者として、魚座（販売場所）を魚商人に貸したもののほかに、多くの魚商人が魚市に魚座を持って魚貝の売買に従事していたと想像される。

「享禄古図」にみえる「中座」

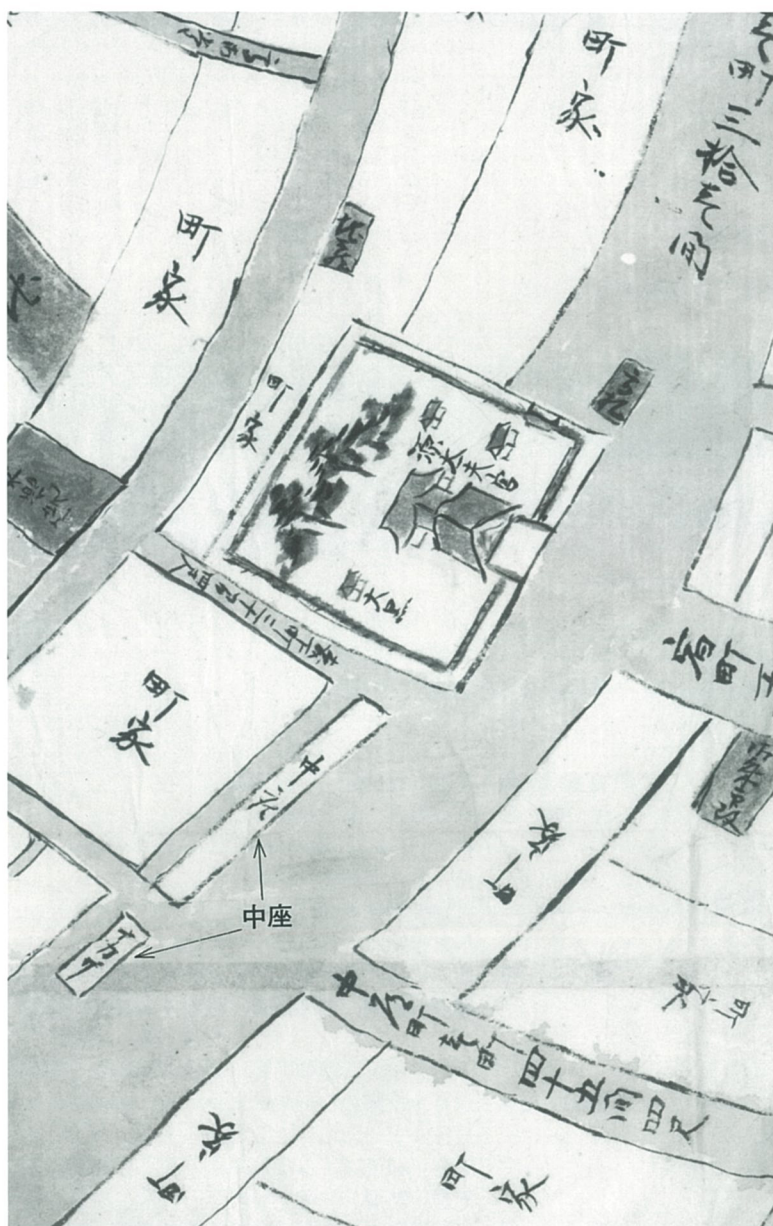
江戸時代中期の地誌や熱田絵図にみえる「中座」が中世までさかのぼることは、いわゆる「享禄古図」に描かれていることからいえる。熱田社権宮司田島家に伝来した「熱田社参詣曼荼羅図」（徳川美術館所蔵）は、奥書により享禄二年（一五二九）の作成と伝えられ、当時の熱田社や町の様子を具体的にうかがうことができる貴重な史料といえる。江戸時代に数多くの模写がなされ、「享禄古図」としてひろく知られるようになった。『張州府志』にも「享禄二年古宮図」（写真2）と題して模写図が収録されている。

「享禄古図」には、上半分に描かれた熱田社本宮・摂社や神宮寺の南に、家並のつらなる町場の光景が描かれている。江戸時代中期の熱田絵図を参考にして場所を比定してみると、下馬橋の下方（南方）、八剣宮から源大夫社にかけての南北の通りは、市場町の通り、それより南に続く通りは神戸町で、その先はもう海浜である。その海浜に接して、魚などを販売する細長い建物が一棟描かれている。左右の二

棟のうち、左側の一棟は両側とも通りに面しており、その位置からいっても正しく「中座」が描かれていることがわかる。市の施設としては、掘立て柱で吹きさらしながら、かなり恒常的な施設が設けられていたことが具体的にイメージできる点で大変貴重である。

（文責・下村）

（注）「熱田町中詳細図」（徳川黎明会所蔵）の写真（名古屋博物館所蔵）によれば、「中座」の区画が貼紙で伏せられており、「中座」の消滅を示す史料といえよう。

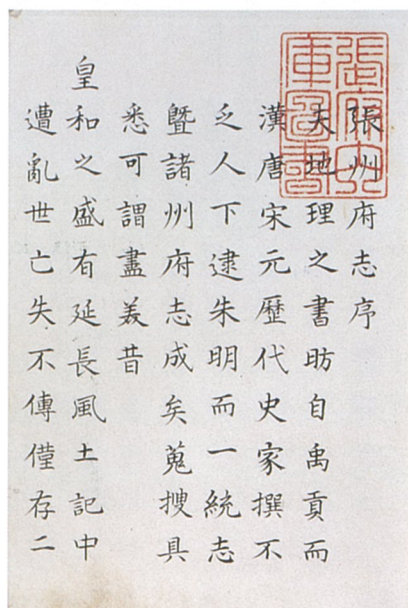


（写真1）



（写真2）

◆表紙さまざま (表紙口絵解説)



張州府志 26冊
宝暦2年(1752)序 28.2×19.6cm

写真の表紙は、藍で染めた縹色(紺より少し薄めの色)の紙で、布目の地紋が施されている。藍染め特有の光沢のある色合いは、上品で落ち着いた感じを与えている。太い線と細い線で枠だけ木版刷りされた題簽に、「張州府志」という書名と巻数が、よく揃った字で墨書されている。

『張州府志』は、尾張藩の命により編纂された尾張国の地誌である。最初の藩撰地誌『尾張風土記』は、三代藩主徳川綱誠(一六五二―一六九九)の特命により、天野信景・吉見幸和らを撰者として開始されたが、綱誠の病死によって未完に終わった。

これを継承し、八代藩主徳川宗勝(一七〇五―一七六一)の命により、松平君山らを撰者として編纂されたのが、『張州府志』である。中国の地誌に倣って、その内容は、府城志(名古屋城下)・熱田志・清洲志を記述し、そのほかに尾張八郡のそれぞれについて、郷村、自然、特産物、社寺、古城、古戦場などが、漢文で記述され、彩色された付図も添えられている。

お知らせ 一閲覧室より一

「蓬左」57号で紹介した「雑賀重良旧蔵書」の目録が刊行され、閲覧が可能になりました。

◇内容 近代和歌を中心に、和歌に関する書籍・雑誌約1万8千点。

◇閲覧開始 1998年10月1日(木)より

◇別棟収蔵の為、閲覧は原則として事前予約制。閲覧希望日の3日前までに、文書または電話で連絡のこと。

◆「雑賀重良旧蔵書目録」販売中◆

◆頒価 ¥5,000 送料 ¥520

◆郵送での販売をご希望の方は、上記金額を現金書留にてお送りください。(送料分は切手でも可)

くわしくは、蓬左文庫までお問い合わせください。

『張州府志』は、後世の地誌の規範とされるほどに権威が高かったが、漢文で書かれていたため、九代藩主徳川宗睦(一七三三―一七九九)は、稲葉通邦にその補定と和文改定を命じた。深田香実らが撰者となつて、天保一五年(一八四四)に『尾張志』六一冊・付図一四枚として完成をみた。平易な和文で記述されており、尾張の地誌としては最もよく利用されたといわれる。

蓬左文庫所蔵の『張州府志』は、一般の写本に比べて大きめの美濃版の紙を使用しており、浄書原本と考えられている。尾張藩御文庫の蔵書印「張府内庫圖書」が捺されている。

名古屋市蓬左文庫

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地
☎(052) 9 3 5-2 1 7 3

◆交通

名古屋駅、栄より
市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行)
「新出来」下車、徒歩5分
大曽根より
JR中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間 午前9時30分～午後5時
休館日 毎月曜日、第3金曜日
祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館)
特別整理期間(2週間)
年末年始(12月28日～1月4日)
閲覧 館内のみ。館外貸し出しはいたしません。
閲覧時間 閉架図書 午前9時30分～12時
午後1時～5時
開架図書 午前9時30分～午後5時
複写サービス 保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行ないます。
電話・郵便による申込みも可。
取扱い時間 午前9時30分～12時 午後1時～5時
展示 所蔵資料のうち30件程度を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

「蓬左」第59号 ☆平成10年10月3日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：菱源印刷工業(株)

※この冊子は再生紙(古紙配合率40%、白色度80%)を使用しています。